

主 題：偽教師への神のさばき③

聖書箇所：ペテロの手紙第二 2章10b-13a節

Ⅱペテロ2：10後半からみことばを見てまいります。

教会の中に偽りの教師たちが入り込み、多くの人々を惑わしていた。そこでペテロはクリスチャンたちが惑わされることなく、正しく歩み続けるために励ましを送るのです。ペテロのことばを借りるならば、「奮い立たせる」ことによって、いま一度彼らの信仰がしっかりと揺るがないものになるように、そのことを目的にこの手紙を記したことを我々は学んできました。

前回私たちが見たのは、この手紙自体がそうなのですが、真理に堅く立って歩み続けるためのすばらしいペテロの励ましのメッセージでした。9節の中に、「これらのことでわかるように、主は、敬虔な者たちを誘惑から救い出し、不義な者どもを、さばきの日まで、懲罰のもとに置くことを心得ておられるのです。」と。このメッセージは読者たちに、そして今の私たちに大変大きな励ましをもたらすものです。特に注目していただきたいのは、そして今もう一度皆さんに思い出していただきたいのは、二つのことばです。一つは「心得ておられる」ということばです。つまり「知る」ということばでした。しかも9節の初めにこのことばが来ているということは、ペテロはそのことを読者たちにしっかりと教えようとしたのです。主はあなたのすべてのことを知っておられ、まさに全知のお方であると。すべてのことをご存じであるお方、それが私たちの神であるということを知らなければならないと。ですから感謝なことに我々は神様に自分が置かれている境遇や状況を一生懸命説明する必要がないということです。今私はこんなに苦しんでいる、こんな悩みがあるのです、そのような説明をする必要が全くないと。神はすべてのことをご存じであると。

また、ここに「救い出し」ということばはありました。「敬虔な者たちを……救い出し」てくださると。神を愛して神に従い続けている者たち、真のクリスチャンたちを誘惑から救い出す、つまりどんな試練があったとしても、神ご自身があなたをその中であって守ってくれる、その中から神は救い出してくださいののだと。確かに我々は信仰者としていろいろな試練を経験します。いろいろな困難や迫害があるかもしれない。しかし、みことばが教えることは、たとえどのようなことをあなたが経験してしようと、主はあなたを守り続けてくださると。この地上の生活において、あなたはひとりぼっちではないと。あなたはその信仰の戦いをひとりで戦い続けているのではないのです。神があなたとともにいてくださると。そしてこの地上での戦いが終わり、地上での生活が終われば、私たちはその方とともに永遠を過ごすことができる。何と慰めのメッセージでしょう。何と励ましのメッセージでしょう。こんな祝福の中にもう私たちは置かれているということです。あなたや私のすべてを知っておられる神が、あなたが経験しているさまざまな試練の中でちゃんと守ってください、そしてあなたを救い出してくれると。この希望を持って多くの信仰者たちは生きてきました。この信仰を持って私たちも生きて行くことができます。また同時になぜ神様、このような悪を野放しにされるのですか、なぜさばきを下さらないのですかと、そんなことを思うこともあります、私たちに心配しなくていい、そのさばきはちゃんと定まっていると、神の審判が下ることをペテロはみことばを通して教えてくれました。

すべての人には神からの報いがあります。主を愛して、主に従う者たちには、それにふさわしい祝福の褒美が与えられるし、主に背を向けて逆らい続ける者たちにはそれにふさわしい永遠のさばきが与えられるのです。だから、偽りの教師たちが入り込んで来てどんなことを教えたとしても、あなたたちが学んだ、あなたたちが立ち続けている真理にしっかりと立って歩いていきなさいと。私たちの神が全知の方、すべてのことを正確に知っておられるお方ゆえにこの方が下されるさばきは正しいものです。間違いのないものです。このお方がどんなことでもおできになる、全能のお方であるゆえに、この方が約束されたことは必ず守られます。このメッセージをもってペテロは小アジアの教会にあるクリスチャンたちを励ました。現在のトルコです。そして、それは私たちにとっても大きな希望です。

さて、ペテロはこの2章を通して、偽りの教師たちのペールをはがし、本性を暴こうとしています。本性を暴くことによって読者たちが十分な警戒をなすためにです。というのはこの偽りの教師たちが教会にもたらした弊害というのは大変大きなものでした。彼らは間違っただけでなく、誤った生き方を教会の中に持ち込むのです。

① 間違っただけでなく、誤った生き方を教会の中に持ち込むのです。

この2章で、既に私たちはそのことを見てきました。彼らが持ち込んだ間違っただけでなく、誤った生き方を教会の中に持ち込むのです。これはみことばの真理に反するものでした。2：1の後半を見ると「彼らは、滅びをもたらす異端をひそか

に持ち込み、自分たちを買い取ってくださった主を否定するようなことさえして、」と書いてあります。彼らが持ち込んできたのは、神の真理に背く、それに反する教えでした。ペテロが言うように彼らは主を否定するような、救いについても、神についても大切な教えを曲解して教え、そしてその誤った教えをあたかも真実な教えとして伝え続けていました。教会の中でこういったことが起こっていたし、これから起こっていくとペテロは予告しています。

この問題は2000年前のトルコの教会だけではありません。どの時代でも、どの国でも同じ問題を抱えています。残念ながら、日本のキリスト教会の中にそういった教えがもうかなり入り込んでいます。さまざまな福音が語られています。みことばを講解するよりも、人間の考えをみことばを使って語ってみたり、最悪のケースはみことばではなくて自分の考えを語ってみたり、そういった教師と呼ばれる者たちが教会の中に入っていることを我々は知っています。だから私たちひとりひとは自分自身をしっかりと調べていかなければいけない。こういったものに惑わされないように自分をしっかりと防御していかなければいけない。

どうしたらいいのかというと、それはあのベレヤに住んでいたクリスチャンたちが行ったことと同じです。パウロはテサロニケで働きをした後、西に移動してベレヤという町に行きます。そのクリスチャンたちはテサロニケのクリスチャンたちよりも非常に熱心であったとみことばが言います。「このユダヤ人は、テサロニケにいる者たちよりも良い人たちで、非常に熱心にみことばを聞き、はたしてそのとおりかどうかと毎日聖書を調べた。」、使徒17：11です。このベレヤのクリスチャンたちは相手が一体だれであるかは関係なかったのです。それが有名なパウロ先生であったとしても、語られたみことばが本当に聖書に基づいているのか、真理に立っているのかどうかいつも吟味したということです。私たちは著名な先生を迎えたりすると、もうその先生が言っていることはすべて正しいと思い込んでしまっています。大変危険なことです。我々の、そしてあなたの責任は語られるみことばが、またあなたがお読みになる本が、そこに記してある内容が本当に聖書が教えているものかどうか、その目をもって吟味しなければいけないということです。それがあなた自身を守る方法です。

② 間違った生き方：みことばの真理に反する罪に汚れた生き方 II テモテ 3：1-5

また、にせ教師たちは聖書の真理に反する、罪に汚れた生き方、間違った生き方を教会の中に持ち込んできました。2：2を見ると「多くの者が彼らの好色にならい、」と書いてあります。また前回見た2：10の初めを見ると、「汚れた情欲を燃やし、肉に従って歩み、」とあります。入り込んできたにせ教師たちは、このような罪の奴隷だったのです。彼らは自分の快楽を満たすことしか考えていない。自分の快楽さえ満たされれば、人をどんなに利用しても構わない。自分の肉欲を満たすことだけを考えて生きていた。そういう生き方をもって教会が混乱に陥っていたわけです。またそのような自分の欲望に従って生きるという大変な生き方だけではなく、彼らは最高の権威者、主権者である神を侮っていた。性的な快楽を満たすために、また物質から得るような快楽を自分が満たすために生きているだけではない。彼らの一番大きな問題は、主権者なる神に対する尊敬を払っていなかった、彼を侮っていたと。それが証拠に神が言われることに従おうとはしていないのです。自分たちの欲の赴くままに彼らは生きていた。しかもこの動詞は現在形でした。継続して、習慣的に彼らはそれを行った。にせ教師が教会に入り込む時は、にせ教師というバッジをつけてはいません。ひそかに入り込み、人々を惑わすのです。特に信仰において弱い人たちを。どの時代でも同じです。ですからあなたはしっかりとみことばに立つことを学び続けてく責任があります。

このような人々が実際に教会の中に入り込んできている。またこれからもそういう人たちが入り込んでくる。そのことをペテロは知った上で警告を与えたのです。でもそれはペテロだけではなく、パウロも同じように警告を与えています。パウロは世の終わりになるとこういう人々が教会の中にまた増えていくことを教えています。II テモテ 3：1 「終わりの日には困難な時代がやって来る」と、その「困難な時代」というのは、人々は「神よりも快楽を愛する者になり、見えるところは敬虔であっても、その実を否定する者になるからです。こういう人々を避けなさい。」(II テモテ 3：4b-5) と。だから、世の終わりに近づけば近づくほど、世の中もそうだし、教会の中にもそういった人々が入り込んできて、人々を惑わすという危険性を含んでいるのです。「神よりも快楽を愛する」と。今私たちがこの世の中を見た時に、そういう人々がこの世界に、私たちの国にあふれています。自分が満足すれば、自分が楽しければ何をして構わないと。でもそういった考え方、そういう生き方が教会の中にも入り込んでいます。いろいろスキャンダラスな出来事が教会の中で起こってしまう、そういう危険は我々はよく知っています。このにせ教師たちは偽りの教えを持ち込んだだけではない。肉欲に従って自分の快楽のままに生きていた彼らがその生き方を教会に持ち込んで、教会に大変な悪影響をもたらすと。これに対してペテロは警告を發したのです。

☆ 「にせ教師たちへの神のさばき」 2：1-22

この2章を我々は学んでいます、偽りの教師たちに対する神のさばきが繰り返し示されていました。

A. 裁きの確実性 1-8節

必ずさばきがあるのだということをペテロはまず最初に教えました。

B. 公正なさばき 9節

しかもそのさばきというのは公正なさばきだと9節が教えていました。

C. 暴露されたにせ教師たちの罪：10a-16節

そしてその後ペテロはこのにせ教師たちの罪を暴露していきます。一体彼らがどんな罪を犯しているのか、彼らは一体どういう存在なのかを繰り返し教え続けます。

1. 「肉の奴隷」 10a節

10節の初めのところで見たように、彼らは肉の奴隷でした。

2. 「権威を侮る」 10a節

また権威を侮るものでした。

3. 「大胆不敵」 10b節

きょう私たちはその続きを見ていきます。どんな人々なのかです。三つ目に私たちが言えることは、この人々は非常に「大胆不敵」でした。10節「汚れた情欲を燃やし、肉に従って歩み、権威を侮る者たちに対しては、特にそうなのです。彼らは、大胆不敵」であったと。新約聖書の中にこのことばはここに1回しか出てきません。彼は神に逆らうだけではなく、みずからを過信する余り、どのような神の警告に対しても耳を貸そうとしなかった。神が何と言われているかはどうでもよかった。神の計画は全く無視したのです。これは私の人生だから自分の好きなように生きて行きます、自分の思いのままに行動している人々であったとこのことばは明らかにしています。

4. 「尊大な者たち」 10b節

4番目に出てくるのは「尊大な者たち」と書いてあります。このことばは「みずから」と「喜ぶ」という二つのことばからなっています。つまり「わがまま」であったり、「強情」です。この人たちは自分を喜ばせることしか考えていないということです。このことばは新約聖書の中に2回出てくるのですが、もう1カ所はテトス1：7です。ここでは「尊大」と訳されていますが、テトス1：7では「わがまま」と書かれています。このことばにはそういう意味があるからです。自分を喜ばせるためだったら何でもする、自分の心が喜びに満たされるのだったら何でもすると。まさに自分のことしか考えていない、そして自分の願いを満たすためであれば、何をしても構わない、そういう者たちであったということです。

5. 「高慢な者たち」 10b-13a節

第5番目に私たちが見るのは、10節の後半から13節の初めまでに記されていることですが、彼らがどういう人たちであったかをまず最初に言いますと、それは大変高慢な者たちであったということです。

10節の後半に「榮譽ある人たちをそしって、恐れるところがありません。それに比べると、御使いたちは、勢いにも力にもまさっているにもかかわらず、主の御前に彼らをそしって訴えることはしません。」と。今お読みしたところと11節は非常に関連しています。なぜかというと11節の初めに「それに比べると」という接続詞がついています。まさに10節の後半と11節は関連しています。「榮譽ある人たちを」と書かれているのは一体だれかということ、これは人間の話ではなく、御使いたち、天使たちの話です。恐らく皆さんの聖書の欄外の脚注をごらんいただくと、「あるいは御使いたち」という説明が加えられています。これはそういう意味があります。なぜかということ今お話ししているようにこの10節と11節が非常に関連しているからです。この文脈からそのことがわかります。

1) 「天使たちとの比較」

11節には、よい天使たちが悪い天使たち、つまり悪霊たちに対してどのような態度で接しているのかが書かれていて、10節はにせ教師たちが御使いたち、天使たちにどのような態度で接していたのかが書かれています。つまりその二つのことを対比しているのです。

(1) にせ教師たちの天使たちへの対応 10b節

・「そしって」 IIペテロ2：2、12、ユダ8

にせ教師たちは天使たちをどんなふうに見ていたのかと言うと、「榮譽ある人たちをそしって、」ということばが最初に出ています。この動詞は「汚す」とか「不敬のことばを吐く」とか「ののしる」とか「悪口を言う」という意味です。ですから、にせ教師たちは天使たちの悪口を言っていたとペテロが教えるのです。その具体的なところを我々を見ることはありませんけれども、そのような態度で接していたということです。

・「恐れるところがありません」

もう一つは「恐れるところがありません」とあります。この「恐れる」ということばは非常におもしろい

ことばで、「ぶるぶる震える」とか「恐れおののく」、非常に怖がるという意味です。彼らは怖がっていたかという、「恐れるところがありません」、彼らは天使たちに対してそのような思いを全く抱いていないのです。恐れを微塵たちとも感じていないということがここに書かれています。なぜこのような態度で接したのかというという、自分たちの方が勝っていると思っているからです。プライドです。

【プライドの罪の恐ろしさ】：

このプライド、高慢さというのは大変恐ろしいものです。私たちが信仰をいただいて信仰が成長するに従って、私たちはこのプライドというものを何とか捨てていこうとします。それが証拠に神様はあなたの信仰の過程にあって、いろいろなものを砕いていかれますが、その中の一つは間違いなくプライドです。なぜならそれまでの人生は自分の力や知恵に頼って生きてきたのですから、自信があるわけです。クリスチャンになっても同じで、私は神様の言われていることを自分の力で実践できる、神を喜ばせることが自分の力でできると奢っているのです。ところが私たちは神の命令に従いたいと思っても、残念ながら従っていない現状。いかに自分が弱く愚かな存在であるかを神は繰り返し私たちに教えてくださいます。そうすると、そのレッスンを通してこれまで自分に信頼を置いて生きてきた私たちが自分ではなくて神に信頼を置いて生きていこうとするのです。これまで自分の力を信じて生きてきた私たちが神の力に頼って生きようとするのです。自分は知恵ある者と思って生きてきたのが、自分の知恵ではなくて、神の知恵によって生きていこうとするのです。そうして私たちのプライドが砕かれて、神に信頼した信仰者として神が喜んでくださる生き方が始まっていくわけです。それはもう皆さん経験されているでしょう。

① 神が憎んでおられる：箴言 8：13

プライドの高い人間は、残念ながら神様に喜ばれていないということです。箴言 8：13 でソロモンがこう言います。「主を恐れることは悪を憎むことである。」、そしてその「悪」が何かを言っています。「わたしは高ぶりとおごり、悪の道と、ねじれたことばを憎む。」と。神様が言われていることははっきりしています。神が「悪を憎む」、ではその悪は何かと言うと「高ぶりとおごり」だと。私たちが高ぶっている姿を見てどれほど神は心を痛めておられるか。

② 人の心を汚す悪：マルコ 7：22

イエス様が人間の心の汚れというものをお話になった時に、実はこのことばが入っています。マルコ 7：22 で人間の問題は悪いことを生み出す心に原因があると。宗教は私たちの行動をある程度自制させます。でも残念ながら宗教は私たちの心を変えることはできない。私たちを作ってくださった神だけが私たちを新しく造り変えることができる。我々の問題ある心、汚れた心とはどういう心かという、イエス様が言われたように、それは「姦淫、貪欲、よこしま、欺き、好色、ねたみ、そしり」、こういったものが私たちの心を支配していると。だからそれに基づいた行動や考えが生まれて来るというのです。そのリストに「高ぶり」が続きます。いかに神がこの罪を憎んでおられるかがよくわかります。

◎ 高ぶりが神に憎まれる理由：

なぜ「高ぶり」が神に憎まれるのか、みことばが教える真理をお伝えしたいと思います。

・争いをもたらす 箴言 13：10

もし、ひとりひとりが高ぶっていたら、そこには必ず争いが生じるとみことばが教えます。箴言 13：10 で「高ぶりは、ただ争いを生じ、知恵は勧告を聞く者とともにある。」と。みんな高ぶっていたら、そこに起こることは、高ぶっている者同士がぶつかっていく、いろいろな争いが生じてくるということです。

・破滅をもたらす 箴言 16：18

また、同じ箴言 16：18 で「高ぶりは破滅に先立ち、心の高慢は倒れに先立つ。」とあります。どれほど神がこのような「高ぶり」や「高慢」を憎んでおられるのかがよくわかります。

・服従の妨げ II コリント 10：5

また、私たちが神様に従っていこうとする時にそれを妨げるのが「高慢」であると、プライドであるとみことばが言います。II コリント 10：5 に「私たちは、さまざまの思弁と、神の知識に逆らって立つあらゆる高ぶりを打ち砕き、すべてのはかりごとをとりこにしてキリストに服従させ、」と書いてあります。神の力、神の知恵に逆らうのです。私たちが高ぶっていたら、先ほども見たように神の言われることよりも自分の考え、自分の思いを優先しようとする。こうしていつも私たちは神のみことばとぶつかるのです。その原因はプライドだと。自分に対する間違った自信なのです。ですから神が言われるのは私たちを砕いて、私たちがこの神様に喜んで従っていくような者へと変えてくださる。

・教会に分裂をもたらす II コリント 12：20

教会に分裂をもたらすという問題もあります。同じ II コリント 12：20 で、パウロがコリントの教会を訪問する時の話が出てきます。私がこの後あなたたちを訪問した時に、私はそこで一体何を見るの

でしょうと言うわけです。というのは、コリントの教会はパウロの手紙を読んで変わったのです。でもいろいろな問題がある教会でした。そこでパウロが行って見た時に、どんな教会を、そこにつながるどんなクリスチャンたちを見るのだろうか。Ⅱコリント12：20に「私の恐れていることがあります。私が行ってみると、あなたがたは私の期待しているような者でなく、私もあなたがたの期待しているような者でないことになるのではないのでしょうか。また、争い、ねたみ、憤り、党派心、そしり、陰口、高ぶり、騒動があるのではないのでしょうか。」とあります。そういうものが存在すれば教会は分裂するのです。まさにコリント教会がそうでした。神にあって一致するのではなくて彼らは分裂していたのです。訪問した時に、そういうものを見ないかとパウロは言っているのです。「高ぶり」は教会に分裂をもたらす大変恐ろしいものです。

・霊的成長の妨げ ヤコブ4：16、Ⅰテモテ3：6、6：4

もう一つ、「高ぶり」というのは霊的成長を妨げるものです。ヤコブはそのことについて、「あなたがたはむなしい誇りをもって高ぶっています。」(ヤコブ4：16)と言っています。つまりヤコブが気づいたこと、ヤコブが注意したことは何だったかということ、クリスチャンたちが自分に対する過信の罪、神よりも自分自身を信じ、信頼するという間違った歩みをしていたのです。この人たちは神よりも自分に信頼を置いていた。自分でできると思っていた。ということは神を必要としないわけです。神がいなくても自分でできる。これほど彼らは高慢だったのです。高ぶっていたのです。それは信仰の成長を妨げるものです。ですから最初にもお話ししたように、高ぶりというのは、霊的に成長していない人の特徴だと言えます。ですからパウロが教会のリーダーを選ぶ時の条件を挙げた時にこう言っています。Ⅰテモテ3：6に「信者になったばかりの人であってははいけません。高慢になって、悪魔と同じさばきを受けることにならないためです。」とあります。「高慢」な人はリーダーにふさわしくないという話です。「高慢」な人は教会を導くのにふさわしくないと。それはその人が霊的にまだ成長していないことを表すからです。

* ダビデの祈り：詩篇36：11

だからあのダビデも「高慢」に対してこんな祈りを捧げたのです。詩篇36：11で「高ぶりの足が私に追いつかず、悪者の手が私を追いやらないようにしてください。」と、ダビデが祈ったのは「高ぶりの足が私に追いつかず」と、いかにこの「高ぶり」、プライドというものが問題をダビデ自身もよく知っていました。私たちもそのことに気づかなければいけない。

(2) 天使たちの対応 11節

この偽りの教師たちの問題はこういった「高ぶり」でした。恐れるものがなかった。神を恐れていない連中は当然天使に対して恐れを抱くはずがありません。自分が一番なのです。自分に自信を持っていた。だから自分のやりたい放題でした。そこで、ペテロはその過ちを明らかにするためにこの天使たちと彼らとを比較したのです。11節「それに比べると、御使いたちは、勢いにも力にもまさっているにもかかわらず、」、御使いたちと人間たちとの比較がされています。

① 御使いたちの優れている点：

御使いたちが優れている点はどこにあるかということ、「勢い」と「力」にあると言います。この二つのことばは非常に似たことばなのですが、「勢い」というのは「能力」や「並外れた、卓越した可能性」という意味があります。また「力」というのは「能力」や「力量」を意味します。ある行動を行うための能力です。実際に、天使たちはいろいろな使命を神様から受けて働きをなしました。もちろん全能ではありませんけれども、間違いなく言えることは人間である私たちよりはるかに「力」のある存在です。

② 御使いたちの行動：

あえてペテロはそのことを明らかにした上で彼らがどんな行動を取っているかを明らかにして、にせ教師たちと比較するのです。この後を見ると「主の御前に彼らをそしって訴えることはしません。」と。この正しい天使たちは、罪を犯している悪い天使たち、悪霊たちのことをどんなふう扱っているかというと、神の前でこの悪霊たちをそしったり訴えたりしていないのだと。彼らの悪口を言ってみたりとか、彼らのことをさばこうとしてみたりとか、そういうことをこのよい天使たちがしていないのだと言っているのです。

実はユダ9にこんなところがあります。「御使いのかしらミカエルは、」と、天使たちのかしらであるミカエルは「モーセのからだについて、悪魔と論じ、言い争ったとき、あえて相手をののしり、さばくようなことはせず、『主があなたを戒めてくださるように。』と言いました。」と。御使いのかしら、その長であるミカエルでさえ、サタンに対して神が「あなたを戒めてくださるように」、彼がさばいたり、彼が悪口を言ったりしたのではなくて、すべてを神様にお委ねした。モーセが死んだ後、恐らくその体についてでしょう、こういったことがなされたのです。その時に御使いのかしらでさえもこのような態度でこの事態に向かったと。大変謙虚な存在だということがわかります。それに比べてこの偽りの教師たちは、非常にプライドにあふれていたと。天使たちと比べてみても、プライドが高いことがよくわかると。

2) 「動物たちとの比較」 12節

偽りの教師たちを天使たちと比較するだけではなくて、12節では動物たちと比較しています。「ところがこの者どもは、捕えられ殺されるために自然に生まれついた、理性のない動物と同じで、自分が知りもしないことをそしるのです。それで動物が滅ぼされるように、彼らも滅ぼされてしまうのです。」とあります。

① 動物の特色：

動物たちの特色が二つ書いてあります。「理性」がない、また「自然に生まれついた」と。どんなことを言っているかというのと、「理性のない動物」というのは正しいことと間違っていることの判別ができないということです。何が正しいことなのか、何が間違っていることなのか、その判断ができない、分別がない存在だと。「自然に生まれついた」というのは、どこかから勝手に発生してきたという話ではありません。この自然界に自然の動物として生まれたということです。何のためかという「捕えられ殺されるために」と書いてあります。食物連鎖を言っているにすぎないのです。動物がその動物を殺して食べて、生き延びていく、その話をしているにすぎないのです。これが動物です。

② 動物との類似点：

その動物とにせ教師たちには非常に類似している点があると言うのです。

- ・ 無知：「自分が知りもしないことをそしるのです。」

12節「この者どもは」とあります。そして「理性のない動物と同じで、自分が知りもしないことをそしるのです。」と。ペテロが言いたいのは彼らは動物と同じで無知である。彼らは分別がないと。彼らは善悪の判断も正しくできない存在だと。まさに動物と同じなのだと言っているのです。なぜなら私たちの周りで学者と呼ばれる人たちが神について語る時に、人間の誕生について語る時に、真理を知らないなどと思いませんか？一体どこからそんな情報を得たのかと。権威を持って彼らは話していますが、残念ながらそれは真理ではない。彼らが創造について語れば語るほど、彼らは全くその真理を知っていないということが明らかになっていきます。ですからまさにペテロが言ったように動物と同じで、何が真理なのかをわかっていないし、正しい善悪の判断もできない存在であると。それでいながら彼らは「そしる」のだと言っているのです。汚し事を言っているのです。いろいろなことについて、人生について、神について、真理について、彼らは何が正しいのかわかっていなくて、ただ間違っただけを繰り返し述べているにすぎない。

- ・ 滅びる：「それで動物が滅ぼされるように、彼らも滅ぼされてしまうのです。」

彼らはどうなるかという、「それで」、結果です。「動物が滅ぼされるように、彼らも滅ぼされてしまうのです。」と。ペテロはおもしろいことを言っています。動物が滅びるようににせ教師たちも同じように滅んでいくと。それだけ見たら全く同じです。でも全く違うのです。

なぜ違うかという、13節「彼らは不義の報いとして損害を受けるのです。」と続きます。確かに死を迎えるという点からすれば同じです。問題はその後話です。動物は死んで終わるのです。動物がその後地獄に行くということは書かれていません。問題は人間なのです。人間は死んで終わらないからです。この「不義の報いとして損害を受ける」という箇所を口語訳聖書はこんなふうに訳しています。「その不義の報いとして罰を受け、必ず滅ぼされてしまうのである」と。その「報い」とは、新改訳では「損害を受ける」と訳しています。口語訳では「滅ぼされ」と訳しています。まさに言わんとしていることはそのことです。神に背き、神に逆らい、そして自分勝手に生きる者たちに待っているのは、その歩みにふさわしい、その信仰にふさわしい報いであると。永遠の滅びであり、永遠のさばきであると。私たちが造ってくださった創造主なる神を愛することもなく、この方に逆らい続け、この方がいのちをもって備えてくださったその完全な救いを拒み続けるならば、その人には最もふさわしい報いが待っているのです。永遠のさばきです。パウロはコロサイ3：25でこう言います。「不正を行なう者は、自分が行なった不正の報いを受けます。それには不公平な扱いはありません。」と。神に背き続けるならば、神に逆らい続けるならば、この神を拒み続けるならば、救いを拒み続けるならば、その人にふさわしい報いがその人に訪れると。

神の敵として生きれば、神の敵にふさわしい報いが訪れるのです。そのことをペテロはここでクリスチャンたちに対して警告するのです。ひょっとしたら彼らはとても魅力的で、知恵があるように見えるかもしれない。でも彼らが向かっているところは永遠の滅びであるとペテロは言うのです。ここにその理由があると。だから惑わされてはいけないと。どんなにすばらしい人間かもしれない、どんなに魅力的な人間かもしれない、どんなに関心を引く話をするかもしれない。しかし私たちは神様の真理に立って、その真理に立ち続けていきなさいと。そのメッセージをペテロは私たちに与えるのです。あなたは救いにあずかっているかもしれない。だとしたら、その真理にしっかりと立ち続けていきなさいと。もしまだこの真理に立っていないならば、このにせ教師たちにされた警告はあなたに対する警告でもあります。今救いのチャンスがあるうちにこの救いにあずかることです。神はあなたを赦してくださる。神はあなたを新しく生まれ変わらせてくださる。どうかきょうペテロが語ってくれた真理にしっかりと目を

とめてください。あなたがどんな選択をするか、それはあなたに与えられた責任であり、そしてあなたの選択にはその選択にふさわしい報いが伴うのだということを忘れてはなりません。

《考えましょう》

1. 主のみことばに忠実に生きることがむだではない理由を説明してください。
2. 偽りの教えから自分自身を守るにはどうすればよいのかをお書きください。
3. 罪の汚れから自分自身を守るにはどうすればよいのかをお書きください。
4. あなたが罪とどのように戦っておられるのかを教会の友人たちと分かち合い、祈りをもって互いに励ましあってください。